
落陽

ウィットテノス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落陽

【Nコード】

N4775R

【作者名】

ウィツテノス

【あらすじ】

以前二度出した小説の三度目の手直し版です。

非合法な商品売るかたわら巻き込まれる災難。

巻き込まれる内に、自分と、今はない幼馴染とのルーツを知る、という話です。

落日

落日

―――八月。

赤い、夕日が落ちていく。

湖面を見つめて、釣りをする振りをしながら、タバコを吹かして、呆っと座っている。

そしてただ、微動だにせずに水上を見つめていた。

落日の極彩色が、湖面に映し出されて心に投影される。

赤く真つ赤に燃え上がる、色。逆光も無く適度な光彩で、眼を焼かれずに見つめる事ができた。

心を奪われる瞬間とはまさにこの瞬間の事で、何の特別性も無い一日にこんな感覚を抱くひと時があるのはまさに予想外の出来事。

どの道、帰ってどうするということもない。

私はタバコをもう一本吸った。

タバコの倦怠感と今の気の抜けた感覚は、酷くマッチして心地が良かった。

心臓の血液が抜けて、体から余分な熱力が消える。そんな感覚。それがたまらなく気分が良かった。

虚脱したように体のこわばりが解ける。こんなに気が抜けたのは久しぶりだと思った。

タバコを棄ててに湖面に近づくと、水鏡に自分の姿が映し出される。

揺れる。ゆらゆらと。赤い色彩と、歪む自らの姿。

それを掬い掴むように、水鏡に手を入れた。

錯覚が沸き起こる。

水鏡の自分と、ここにいる自分を入れ替わるような。それを、引張り出すように、更に湖面に深く手を差し込んだ。

そのとき、不意打ち的に後ろから声をかけられた。

「お兄さん、こんなところで何をしてるんですか？」

後ろを振り返ると、下宿先の家族の娘が立っていた。

身なりからして、夕飯の買い物らしく、水面に手を入れる私の様子を怪訝な顔で覗いていた。

気がつけば自分は厳しい顔をしていて、眉根に皺が寄っているのをふと解いた。

「釣りです。唯一の生きがいです。加奈子さんこそこんなところに偶然通りかかったんですか？」

自分の不可解な行動を誤魔化すように、逆に質問を相手に向けた。

「偶然というか、スーパーから家に帰るにはこの道が一番早いんです。それより、タバコ……」

加奈子さんがタバコを指差す。意味が、よく分からなかった。

「え、タバコ？」

「未成年ですよ。お兄さん……」

言われて気がついた。下宿先ではタバコは吸ってないということになっっているんだ。

一応19歳9ヶ月だが、未成年は未成年という事で吸ってないということにしてたんだ。

本当は八歳から吸ってるからもはや体の一部と化していて、吸うのが当たり前前状態だから言われても気づかなかった。

「あ、ああ、これ？ 実は昨日友達から貰ってさ、俺ももうすぐ二十歳だし、今からどんな味かと思って試しに吸ってみたんだ。

ちよつどいま。凄いタイミングで会っちゃったなー、参ったよ」

「……そうなんですか？ とにかく私、帰りますから。お兄さんも一緒に帰りますか？」

怪訝な顔を緩めて、いつもの余裕気な表情でこちらに声をかけてくる。

しかし、いま、日常にすぐには帰りたくなかった。

「いや、釣具も片付けなきゃいけないし、先に帰ってて。買い物お疲れ様」

そう言つと「うん、じゃあ……」と言つて、また堤防を上つていった。

後姿が遠のいていく。

距離的に聞こえない距離に離れた頃、溜めていた煙を一気に吐き出した。

正面に向き直つて、眼を閉じずに赤い逆光を正面から受け止める。なぜ自分はここで、こんな事をしているのだろつと思つた。

赤い夕日が落ちていく。落日が、目の前に広がっている。

カジュアルな服装の中に、ナイフと、生簀の水の張っている部分の下には今朝仕入れた阿片や抗精神病薬等が入っていた。

なぜ自分はここにいるのだろうか。私はいま、誰になってるんだろう。

赤い夕日が溶けていく。

釣具を片付け、ずしりと重い重圧を感じながら、湖面を振り返ると、自分が映っていた場所に朱い怪物のような影が見えた。

………朝、眼が覚めた。

窓にはカーテンが閉じられておらず、そのまま直接太陽の光が私に当たっていた。

半身を起こし、大きなため息をつく。気だるさが体中の節々から染み出しているような感覚だった。

しかし、出勤の間であるので、眠り込んでるわけにも行かず、ベッドから降りてスリッパを履き、そのまま部屋を出た。

部屋から右手には階段と、トイレがある。私はトイレで事を済ますと、二階の居間の方に入った。

二階にもキッチンがあり、その隣に簡易的な洗面所がある。そこで歯磨きと顔を洗顔して目を覚まさせた。

朝にわりと気力のある日はそのままシャワーにも入ってシャンプー

だけするのだが、今日は何だかそこまで活力が無かった。面倒だと感じたのだ。

だから一階に降りて、朝食を済ますことにした。

一階では既に誰かが起きているようで、テレビのニュースが流れる音がしていた。

案の定、ソファには叔父さんが座っていて、キッチンでは加奈子さんが朝食を作っているところだった。

「おはようございます」と私が言うと、「おはよう」と加奈子さんが答え、「おはよう、瑞樹君。今日は早いんだってね?」と叔父さんが問いかけてきた。

今日予定があることは既に伝えてあった。

「そうなんです。だから朝食を食べたら早めに出ないといけません。叔父さんとは一緒に出られないですけど……」

「いや、良いから良いから。瑞樹君も今が会社で一番忙しい時期で、色々経験を積んで学ばないといけない時期なんだから、叔父さんに合わせる必要は全然無いよ。

叔父さんはもうすぐ会社は引退だから、気楽なもんだよ」そう照れたような困ったような顔をして笑った。

「僕は叔父さんと同じ会社に就職すれば良かったなあと思っています。叔父さんなら上司でも怒らなそうですし、社会人としても大先輩なので叔父さんみたいな上司を持てたらなあって」

「ははは、叔父さんも家では偉そうだけど、会社では大した人間じゃないよ。それより……」と言いかけたとき加奈子さんが料理を運

んできた。

「はい、鮭とご飯と味噌汁。適当にちゃんと食べてね」矛盾した事を言いながら三人分の食事を運んでくる。

叔父さんは言いかけて、またテレビに見入ってしまったので、先程言おうとした事は特に聞かなかった。

加奈子さんはまだ中学三年生なのに朝食を作れる点で偉い。いや、作れることより作ってくれる点で偉い。

昼食はみんな学校や仕事先で食べるし、夕飯は叔父さんが作ったり外食をする事が多いけれど、朝は加奈子さんが作ってくれるというパターンが多かった。

その点、料理が出来ない自分は居心地が悪かった。

ともかく朝食を全て食べ終わると、二人に声をかけて部屋に戻っていった。

部屋についた瞬間、また気がつくため息をついている。これは、癖なんだろうと思った。

特にため息の原因について深く考えずに、スーツに着替え、バッグの下準備をする。これが重要な作業だった。

バッグの下の部分は革張りで隠してあるが、物を入れるためのスペースがあり、ここにいつも百万単位の金を入れていた。

拳銃もここで、今日は商売品である阿片と各種薬品類を詰めていた。ナイフだけはすぐに取り出すためにスーツの裏の改造したスペースに入れていた。

この作業を見られると社会から即退場となるので、足音には気を配った。

今日も無事作業が終わると、一息ついてそのままスーツにバッグ姿で洗面台に向かった。
やはり外見が気になる年頃であるから、髪型を整え、顔をチェックしてから一階に降りた。

革靴を履き、玄関のドアを開ける。

昨日の夕刻とは打って変わって澁刺とした太陽に、眉根をしかめた。家からバスで中央道まで行くと、そのまま駅方向に直進して三条通りに入り、さらにその道を直進して九内大橋を渡る。

九内大橋の先は地方から流入した人々が道端に小屋を作って溢れ返り、都市の中でも雑多な居住区となっていた。

小屋は川沿いから歩道沿いにびっしりと乱立していた。

ここで闇市が開かれると他の居住区の住民も顔を覗かせ、活気が涌くのだが、今は官憲の取締りが強くて市を開く店はまばらだった。友人の三村はこの地区で団地マンションの二階部分に店を構えていた。

といってもマンションというのも躊躇うようなぼろの建物だが、それでも建物の中というだけでも随分マシだ。

そういったマンション群は松ノ木通りを直進し、乱立した小屋がまばらになった地域にある。

築数十年のマンション群は、ひび割れ、人が居住して無い階はまったく手付かずであるけれども、今も現役で稼動して、その殆どを都が管理している。

元々都営団地だったのだから当然だけど、地方から流入した人々に格安で提供すれば良いのに、と私のような一般市民（？）は思ってしまう。

ともかくも各マンションの壁に書かれている、各マンションを識別する番号を頼りに、三村が住んでいるマンションを探し回った。

日差しが異様に暑い。
酷暑というのも納得というほど、照りつける熱波は酷い。
視界は揺らぎ、塵気楼なんかが起こる状況の団地の中を、周囲の身なりと目つきの悪い人々を横目に歩いていた。

道順は大体のところ覚えていたから、周囲の似た形状のマンションの中から、三村が住む建物を見つけた。
そして建物に目をつけると早足で建物の中に入った。
階段から二階に上がる。

この階にこいつが住んでるのだが、これが五階とかでなくて良かったといま汗を拭いながら思った。

ドアの前に立つと、横の名札は真っ白だった。
ぴんぽーん。と、チャイムを鳴らす。

数秒の沈黙の末、中からどたとたと足音が聞こえてドアが開いた。
定時の時刻どおりだから、インターホンによる確認は無かった。

ドアが開かれて出てきた友人の三村は、ちょっと人目につくほどに常に見開かれた眼を向けて、愛想良く笑った。

「いらっしやい、入ってくれ」

玄関から室内に通される。廊下というものは存在しなかった。もちろん居間が一室あるだけ。

「いや、いつもご苦労様です。ちゃんと仕入れられた？」

言うよりも見せたほうが安心するだろうから、バッグの書類などを床に落とし、革張りを外して阿片の葉と睡眠薬、坑鬱薬、抗精神病薬、劇剤など、受注されていたリストの物をテーブルの上に置いた。

三村はメモを取り出して内容を確認する。そして一人、何度か頷いた。

三村は中流上流階級を対象にした薬屋で、商売の方法や内容は特に聞いてないが言ってみれば薬の売人の小規模な元締めだった。

そして三村は胸ポケットの財布の中から金を取り出しながら言った。

「OK、いつも悪いね。数えてくれ」

渡された札束を数え、言い値通り45万あることを確認すると、私は札束をバッグに閉まった。

革張りの革を上から押し付け、書類の類を拾っていると、三村が話しかけてきた。

「なあ、あんたまた転居したんだって？ 何かあったのか？」

「ちょっとトラブルがあったんだ。大したことじゃない。本当にまづかったらこの町にはいないよ。心配するな」

「それは分かっているけど……あんたがいるから俺達は商売成り立っているんだ。あんたがいなくなったら俺たちは困っちゃうから、身辺だけは気をつけてくれよ。」

特にあんたは後ろ盾が弱いんだからさ」

「後ろ盾があったらこんなに安く提供できないだろ？」

大丈夫、心配するな。迷惑だけはかけない。それだけは絶対に約束だ」そう言つと三村は困つたような顔を浮かべたが、その感情の真意は分からなかった。

「じゃあ俺はこれで」そういつて鞆を閉まった。

「ああ、じゃあな。今度プライベートで会おう。みんなで久しぶりに会うつてのも良くないか？」

「みんなの都合がいたらな。じゃあ」そう言って革靴を履いて三村の部屋を出た。

居並ぶ団地の中を歩いていく。

ここは貧民街の中のビバリーヒルズみたいなもので、マフィアの下位構成員が居を構えていたり、ギャング気取りの若者グループのメンバーが借りてたりと、一般の貧民街出身者はあまり立ち寄れない。玉に抗争はあるが、妙な均衡が成り立っていた。

友人も何人がここに住んでいる。

もう潰されてしまったけど、以前グループとして活動してたときの友人達が、この区画の至るところに散らばっている。

みんなそれぞれ売人をやっていたり、または麻薬などの生産者となっていたりしているが、私はその中で中間業者であると言えた。

海外からの合法非合法問わず商品を買付け、信用の置ける商売人に売る。その繰り返しだった。

金があればあるほど良い。

それが安心に繋がる。

特に、いつリタイヤするかもしれない身となれば、いざというときのために金はどうしても必要だった。

貧民街の松ノ木通りの途中には、貸し倉庫が転々とまばらに設置されている。

それらは団地が現役だった時代には無かったもので、闇市が横行し始めてから貸し倉庫業を始めた人々が設置したものである。

恐らく団地内に数百はある。闇市はそれだけでも非合法であるから、物品を没収されないための倉庫が必要となり、ニーズに応えて設立されたのだ。

この団地に設置した事は非常に賢い。

団地内はマフィアと犯罪グループがひしめき合っているから、官憲が非常に捜査をやりづらいつらいところでもある。正確に言えば嫌がる。

なのでここに倉庫があることはこの区画の経済物品を守る上で非常に良い制度だと言えた。それでも玉に捜査が入ることはもちろんあるけれども。

そして私もこれらの倉庫群に分散して倉庫を借りている。

分散すれば、仮にどこかの倉庫にガサ入れが入っても物品を全て失う羽目を防げるから、当然の方法といえた。

今はそのうちの一つに向かっていたのだが、なぜか私の倉庫の前には帽子を被ったラフな服装の若者がタバコを吸って座っていた。

普通この団地内の倉庫には住人は寄り付かない。

なぜならこの団地の倉庫の安全は、ここに居を構えるマフィアグループが一応でも保護する決まりがあるからだ。

倉庫業者がマフィアに金を払っているから、官憲の取締りの妨害や、窃盗があればその下手人探しと制裁を加えることになっている。

だから、普通の人間は近づかないのだ。

タバコを吸っている若者がこちらを見た。

そこが自分の倉庫であると教えるのは論外だ。

倉庫は「財産でもある。

事情を知らない人間がここでたまたまタバコを吸っているのだろうか？ と、頭に疑念がよぎる。

そんなたまたまはあるだろうか、何かこの若者には意図があるのではないのか？

そう考えながら、倉庫の方を見ずに通り過ぎようとした時、声をかけられた。

「すみません、宮本瑞樹さんでしょうか？」と私に声をかけてきた。

私の名だ。やけに低姿勢なのが気になる。

客だろうか、それとも別の目的だろうか。

どちらにしても取り合うつもりは無かった。だが、知らない振りをするにはあまりに反応が遅すぎた。

「瑞樹さん、ですね」

鼓動が一際高鳴った。

「そうだけど何だ」

相手のほうを向いて表情を歪め、早口でまくし立てる。

余裕が無い。

普通なら、え？ とか、誰ですか？ とか聞く場面だろうか、そんな余分な事より用件を聞いた。命の危険があるから、その真意を早く知りたかった。

相手の顔より胴体の動きに注視しながら、緊張しているのか、それとも警戒状態になるところなのか、体は微動だにしなかった。

「私の友人が貴方に注文したい物があるので、詳しい話をするために一緒に来ていただけませんか？ つまり、私は客です。

よろしいですか？」

よろしいわけはもちろん無かった。

ここならまだ人目はあるが、こいつがもし敵対者でどこか人気の無い場所に連れて行かれて何かされてもしたらたまらない。

また客であつても、正規の手順を踏んでない客はお断りだった。だからこの場で断るしかなかった。

私は鼓動の高鳴りと共に顔を相手のほうに近づけて威圧しながら言った。

「あんたが信用できないよ。なんで俺の倉庫の前にいる。どうせ知つてんだろ？俺の倉庫だつて。知つてて張つてたんだろ。」

どんな意図だか分かんねえけどあんまり気分良くねえな！

お前えが誰だか知んねえけど俺は一見さんはお断りだし信頼できるグループにしか売らねえ。

悪いけどお断りするね」

そう言つて一歩下がつた。

断つたとき気の荒いやつだと突っかかってくる事もある。気休め程度の対応だった。

しかし相手は顔色をまったく変えずに愛想良く笑っていた。

「倉庫に張つてたのは貴方との連絡の取り方が分からなかったからです。誰に聞いても教えてくれませんのでね、こちらで調査して貴方の倉庫を見つけたので、ここで待つてたわけです。」

貴方より倉庫を見つけるほうが簡単でしたよ。貴方自身はどう調べても見つからなかったですから」

「お前そうは見えないけどマフィアか？ まさか警察じゃねえだろうな。面倒ごとはごめんだ。言いたいことがあるならさっさと真意を言え。信用できれば聞いてやる。」

質問はこうだ。そこまでして何で俺を探す？ 俺に何をして欲しい？ お前は誰でどういう人間だ、だ」

「では答えましょう。マフィアでも警察でもありません。救国軍です。」

海外の輸入業者とパイプを持つ卸業者が欲しいのです。それが貴方。貴方には我々が活動するために必要な物資を買い付けて欲しい。ここまで言ったのだから、ついてきてもらわないと困ってしまいます」

げ、救国軍。

反体制派のグループじゃないか。しかも大して規模もでかなくて、やたらとやばいことばかりやるっていう噂の。

反体制派はこの国には数十はあるけど、その中でも過激な事ばかりやって官憲と揉めまくっている。つまり潰されやすい。おまけに係者は死刑。

こんなのに関わったらただでさえやばい状況が更にやばくなることは必須だった。

私は話しながら同時進行で文章を頭の中で高速に作り出す。

「ああー、救国軍でしたか。」

確かに、客としては上玉ですが、しかし私にはパイプはあるにはあります。貴方方のグループが活動するための物資を賄うだけの資金も商品の収集力ありません。

どうやら、買いかぶっておられたようです。他をあたって頂けませんか？ 何なら他の業者を紹介しますので……」

言葉に細心の注意を払いながら作り笑顔で誤魔化そうとした。業者を適当に回して後は知らんぷりを決め込もうと思っていた。が、相手は逆に不機嫌そうな顔をした。

「それは出来ません。」

私は代表から直接貴方に頼むように指示されているから、貴方と交渉する必要は無いんです。

必要なら力づくでも来てもらいます。質問に答えたのは私の個人的な好意です」

「ここで騒ぎを起こせば、色々面倒な事態になるがね」

相手を揺さぶるつもりでそう言った。

抵抗すべきだろうか？　しかし救国軍と敵対するのはやばすぎる。ナイフに手を伸ばせなかった。

「マフィア達の事ですか？

確かにここで暴れば来るかもしれない。

しかしそんなことは私には関係ない。

貴方を連れて行く。マフィアを敵に回そうが、暴れようが、何しようが。

私にそれができなければ他の仲間が連れっていく。

子供の使いとは違うんです」

最悪な展開だった……………。

救国軍

結局私は車に乗せられて打ち棄てられたビル群が佇む地区で降ろされた。

移動中目隠しをされていたのだが、廃ビルに入っていくときに目隠しを外されたので、この場所が都市港湾付近の旧末奈町の区域だろうと思った。

廃ビルの中をあの若者に先導されながら、フーイー、とため息をついた。

心臓がばくばく鳴ってる。相当緊張してるようだ。体中が落ち着かない。

バッグは「預かります」とか言って没収されたので拳銃も無い。が、どういうわけか身体検査はせずにナイフは没収されなかった。

相手は何もしないと言っているが、本当に敵意が無いのだろうか？目隠しをする事も、逃亡防止と抵抗意欲を殺ぐためかもしれないが、帰す事を前提として目隠しをしたとも考えられる。

抵抗意欲を削ぐためなら目隠しを外す必要はなかったはずだ。身体検査をせずに、武器を奪わないというのも、私をどうにかするつもりならおかしな話だと思うから、こいつが言った客だという話の信憑性は高まった。

だが高まっても圧倒的に不利な状況で、どんな商談を持ちかけられて、どんな展開になるか不安になるから、頭で安全だと思っても緊張しまくりだった。

……貧血起こしそつなぐらい。

地下の駐車場から階段で一階に上ると、目の前に広い空間が広がり、

かつてはホテルであったろうビルの玄関広場には、私服に小銃を持った若者達が、それこそ何十人も生活していた。

「二階です」と若者が言うと、彼は私を先導してフロントの横の階段から二階に上って行く。

階段の横にはエスカレーターもあり、それは打ち捨てられたように風雨に晒され、当然のように稼動してなかった。

三人の若者のグループが階段を降りてきて、こちらを見ると、フィと興味無さそうに視線を逸らす。すれ違う人間がみな同様の反応をするから、少し異様だった。

二階の廊下を二人で歩いていくと、若者は「カフェ・セファ」と書かれた看板のある部屋に入っていた。

そこにはまた、若者達が何人かタバコを吸っていたり食事をしていたり、それぞれ比較的寛いでいる様子でテーブルに座っていた。

その中の一人、タバコを吸って本を読んでいる若い男性の前に私は連れて行かれる。

そして若者とその男の前で「連れて来ました。彼が宮本瑞樹さんです」そう親しげに語りかけた。

本を読んでいた男性はタバコの火を消し、本を閉じてこちらを横目で見た。

眼光の鋭い、瞼の重そうな、厳しい顔つきの男性で、私を見てふつと笑った。

「宮本瑞樹……ああ、顔の広い卸問屋のことだな。

……お前に話があつて呼んだんだ。悪い話じゃない。まあ座って聞け」

そう言って相手は相席側に座るように私を促した。私を連れてきた若者は私が座るのを見るとカフェを出て行った。

「俺達は反体制派なんて烙印を押されているが実情はそうじゃない。目的があって活動しているだけで、その活動はこの国の政府に害する物ではない。と言っても信じないか…。

まあそんなことは実はどうでも良い事だ。俺達が良いやつか、悪いやつかなんてな。

金儲けの話だ。

お前と専属的に契約したい。

お前は都度都度俺達の活動に必要な物資を調達し、俺達はその代価を払う。

お前は儲かり、俺達は物資を得る。簡単な話だ。

契約に当たっては幾つかの注意事項さえ守れば、お前の生活や活動に一切干渉しない。

お前が損をする点は反体制派と関係を持つというリスクだけ。

返事は、イエスカノーかなんて聞かない。お前は頭が良いと聞いている。

俺達が問答が嫌いなのは察せるはずだ」

それだけまくし立てると、こちらの反応を待たずにさらに一方的に言ってきた。

「お前が本当に使えるか試させてくれ。

ビスター製のAAKを20丁とそれをフルに撃ちまくって十回弾切れになるだけの弾薬を用意しろ。

それからラスター社のGライフルを一丁。弾薬は十倉。

それからレーションを各十種類、36食分ずつ用意してくれ。

今回はそれだけで良い。期限は一ヶ月だ」

今まで聞いたことも無い量の注文だ。当然そんなの出来る訳が無い。

「おいおい、おいおいおいおい。」

そんな大量の物資を買い付けるだけの資金力が個人の卸業者なんかにあるはず無いですよ。俺にはそんな金は無い。

だいたい武器の買い付けは専門じゃない。港に降ろされた軍需品を横流ししてもらってる程度だ。

おまけに食料なんてそんだけの物資をどうやってここに運びゃあ良いんです？」

「それはお前が頭を捻れば良い。」

出来なければ出来ないで構わない。だが努力はしてもらおう。前金で全額払おう。一千万で」

一千万……とつさに頭の中で計算した。

G Iライフルは弾薬を入れても百万というところで、食料も大雑把に考えて百万。

A A Kの相場が一丁15万から30万として、更に弾薬まで入れてプラスになるかどうか。

飯に買い付けに成功したとしても、相場より高く吹っかけられる場合もあるし、相手の事情次第で安くもなる。

いやいや、それより前に聞く事がある。

「もし出来なかったら、俺はどうなるんだ」

男は冷笑した。「別にどうもしないさ。仕入れられた分に対しては金を払い、それにプラス三百万をつけて取引終了だ。

その金はまあ、我々と関係を持ってしまった慰労金だな。

だが失敗したらそれ以後の取引は一切しない。君にとっては、悪い話じゃ無いだろ？」

「ああ、そうだな……。やるよ」余計なことは言わずに、取りあえずその言葉を信じるしかなかった。どの道、断れないだろうから。

「では詳しい話は山崎としてくれ。そこでノートパソコンをいじってる彼女だ」

男がそう言うと、隣の席でひたすらパソコンをいじってた女が、気だるげにパソコンを閉じて立ち上がった。

「じゃ、ついてきて」声まで気だるそうな声だった。

女についていくと、廃ビルの部屋の一室に通された。その部屋にある筆筒を開くと、しばらく何かを探していて、やがて書類を渡された。

「そこに今回の注文品と救国軍メンバーに繋がる電話番号が書かれている。

何かあったときは電話して。

貴方はこの商談中私たちの関係者になるわけだから、仕事に関しての妨害や、身辺に危険が迫った場合私たちを使って問題に対処できる。

つまり商談中は協力関係にあるって事。

それから携帯を渡しておくから。

最初に言っておくけど、その携帯を持つてる間貴方の位置は私たちに分かる。身の安全のために、気休め程度だけど。

それから私の電話番号も載ってる。

仕事に関する段取りや進展状況の共有のために定期的に電話をし、貴方もかけてきて良い。分かった？」

「充分分かった。ところで金は？」真つ先にそこを心配する。

「金額が金額だから、貴方の指定する場所に送るから。

それは運転手と相談して」

「分かった、これで話は終わりか？ この後どうすれば良い？」

「車で行きたい場所に仲間が送から、あとはご自由にお仕事をどうぞ」

「分かった、じゃあ帰って良いわけだ」相手にそう聞くとこくりと頷いた。

なので逃げ帰るようにその一室から抜け出して廃ビルの玄関に向かう。途中ため息が何度も出たが、ため息の原因は考えなくても明らかだった。

ビルの外を出て、そのまま走って街まで逃げ出したかったが、金がないとどうにもならないので車を探した。

車はビルの向かいに止まっていた。

車の運転席の窓を叩くと、相手は頷いて後ろのドアを開けたのだった。

金の隠し場所には非常に困った。

散々考えた挙句、自分で持つてるのが一番安心できるし利便性もあるんで、バッグに詰めて家に持ち帰ることにして、アタッシュケースに入った一千万を車内で自分のバッグに入れ替えた。

緊張が急に解け、車の中での作業でもあったから酔いそうになって、車から降りて家に帰る頃には気分は最悪だった。

家の玄関を開けて時計を見るとまだ午後五時だった。

いつもは八時帰宅だが、時間を普段通りに合わせる余裕も無く早くベッドで寝たかった。

すると廊下からパタパタと加奈子さんがやってきた。

「あれ？ 今日はずい早いですね。会社はどうしたんですか？」

「ああ、ちょっと頭痛がするから早引きさせてもらいました。

なので今日はもう部屋に戻って眠ります」

「ええ、大丈夫ですか？ 熱は？」演技ではなく本当に心配してるんだろぅなという顔で聞いてくる。疲れてるのが、その素の反応で何だか安心できた。

「平熱です。ちょっと難しい仕事が続いてきて頭をつかいますぎちゃったのかな。

でも少し休めば回復しますから」

「そうですか……？ 今日夕飯食べれますか？」

「いや、今晩は食べないって伝えておいてもらえますか？」

このまま寝ますので」

「分かりました、ではゆっくり休んでね」

「はい、では……」やたらと重いバッグの重みを気づかれないように、なるべく軽い足取りで階段を上る。

加奈子さんは別段不自然に思っていないようだった。

後は部屋のどこに隠すかだが、本当に頭が痛くなって、今日はさっさと眠りにつきたいと本当に思った。

都市港湾地区

朝、眼が覚めた。

いつも通りの天井と、夏の日差し。

眼が覚めても、その寢覚めは意識の曖昧なものではなく、すぐに昨日の状況を思い出して、それと同時に一層目が冴えた。

寢覚めは低血圧なのかなんなのかわからないが、非常に良くて、起きて寝ぼけるということは私には無かった。

すぐにベッドから降りて、腰掛けた格好のまま止まった。

部屋に目を配って昨日一千万円を隠した場所に一つずつ目をやって覚えているか確認する。

まずは押入れのダンボールに三百万、ベッドの下の紙袋の底に百万上の棚に百万等等、部屋の中に分散して隠していた。

量が量だけに一箇所に隠せないし、仮に一箇所だけ見つかってもヘソクリ程度で済むかもしれない。

それでも百万単位の金だから言い訳には苦労しそうだが。

とにかく今日は早速業者に交渉に行こう。

私の知り合いは大抵規模の小さい業者と、扱いは外国人の輸入業者に知り合いがいる。

彼ら自体は政府から正式に認可されている業者だが、私のような人間に対しての横流しもしてくれる業者も中にはいて、そういった業者との顔の広さが私の商売上の武器だった。

まず、一番信頼できて顔が広い水谷を当たってみようと思う。

彼は昔私がグループにいたころの仲間で、信頼できる人物だから、何かあったときは彼に頼るのが常だった。

もし水谷がダメだった場合はオイネルにする。

オイネルは外人で扱いづらいが今回のような規模のでかい取引にはうってつけた。

交通にかかる時間とアポイントメント、商談の時間を考えれば今日回れるのはせいぜいこの二人だろう。

二人とも今日会えるかすら分からん。

事前の連絡の取り合いは商売の性質上難しいから、二人ともアポなしで行くぶん、そういう不安はあった。

会ったとして注文品を収集する能力があるか、収集する能力があったとして応じてくれるか。そして金額は幾らか。

それらは商売に常に付き纏う不安ではあるけれども、今回の場合は不安もまた一人だった。

そんなことを考えていると無性にタバコを吸いたくなってきた。

喫煙者なら誰でもそうかもしれないが、考え事の最中はタバコを吸いたくなる性質で、非常に効率の悪い喫煙なんてやめたいのだが辞めるのにかかる心的負担に耐える動機がまだ存在しなかった。

だから、家ではタバコを吸わない事になっているのでさっさと家を出て自由行動に移りたかった。

朝のエチケットを全て済ませると、洗面所で一呼吸置いて一階に降りた。

階段を降りて廊下を歩くと話し声が聞こえ、案の定居間には二人が既にいた。

「おはよう瑞樹君」「おはよう」今日は先に二人に声をかけられて、私も朝の気だるさに耐えながらそれを表わさないように笑顔を見せた。

「おはようございます。二人はいつも早いですね。僕ばかり遅刻してる」そう笑うと、加奈子さんも食器を並べながら少し笑顔を返した。

「昨日頭痛で体調悪かったんだから、仕方ないよ」そう返すと、また食器を取りにキッチンに戻っていく。

叔父さんはテレビの対面にある、ソファに座っている。新聞を讀んで、なにやら難しい顔をしていたところに声をかけた。

「叔父さん、すみませんが今日も早めに出勤しないといけないので、食べたらずぐに出かけます」

叔父さんは新聞を降ろして不思議そうに応える。

「そうかい？ 構わないけど、昨日早引きしたばかりなのに、何か用事があるのかい？」

「ええ、昨日のことで会社に迷惑をかけてしまったと思うので、今日は早めに行って仕事に取り掛かりたいと思っています」

「……瑞樹君は真面目な性格だから言うけど、無理をしすぎちゃいけないよ。休めるところは適度に休まなきゃ。瑞樹君には難しいかな」といつて笑うのを、私もいえ、と言って作り笑いを返していた。

「あ、そういえばお兄さん、今週の日曜日空いてるかな？」加奈子さんが料理を運んで、食器を下ろしてそう聞いてきた。

「ああ、どうだったかな。まだ未定だけど」と私は曖昧に返した。

空いてるといふ事は何かしてくれといふ事だろうから、即答はすぐには避けた。

「日曜日に、何かあるの？」

「お兄さん車の免許持つてるよね。近くで洋服を買いいたいんだけど、運転してもらえないかな？」

「ああ、日曜日に空いてたらもちろん構わないけど、今週はどうか。まだ予定が分からないのでダメになっちゃうかもしれないけど……」

「運転してくれたら、何か奢るかも」と言われてつい苦笑いしてしまった。助け舟を出してもらおうと叔父さんの方を見ると、叔父さんは僕が見るなり笑ったのだった。

「加奈子は洋服を買うためにお金を貯めてたらしいんだ。叔父さんは今週用事があったっていけないけど、都合がついたら連れて行ってあげてくれないかな」

叔父さんは遠慮させてくれると踏んでただけに、少し困った。

「ええ、予定がついたらもちろん行きますけれど、予定がダメになったら僕は泣く泣く会社に行かないと……」と、苦し紛れに言った。

「そっか、無理には頼めないね。都合がついたらで良いから、考えておいてよ」叔父さんは私に笑いかけると、また新聞に見入っていた。

「じゃあ予定がついたらで良いから、お願いするね。ごめんね、会社の都合があるのに」

「いえ、本当にすみません、予定を確認しておきますので」

「あ！ ごめん、忘れてた、ご飯出来たよ」

それでご飯を食べながら、箸に手をつけ、心の中でそれどころじゃねえんだよ、と毒づいた。

都市港湾部の一角には商館が立ち並び、都市人やら地方人やら外国人やらが行きかっている。

北詮地方が東跋の侵入によって荒廢の憂き目にあっているとのこと、近頃は軍需関係や輜重品、果ては薬品類まで活発に出回っているのだ。

私の仕事は商売人から注文を請け、他の中間業者より安く品を仕入れ、販売する事で、中間マージンを得ている。

そもそも食料、衣類、酒類、果ては娯楽用品まで統制されているから、私のように商品を輸入段階で横流ししてもらえる中間業者は、大抵規模のでかい犯罪組織がバックにいた。

そうじゃなければ、すぐに官憲に目をつけられてパクられる。

だから、商品の殆どは本来直には手に入らない。どえらい関税のかかった政府の正規店から買うか政府から支給される以外は。

つまり厳密に言えば私が販売してる商品は関税がかかってない分本来全てが非合法なのだ。

麻薬類は商売の付き合い上取り扱わない訳にはいかないが、一般の商品に関しては、大して罪悪感も湧かない。

商品に、政府の名札がついてなきゃ売れないっていうのは、私には

知ったことではなかった。

港湾地区商館街の入り口につくと、そこには通行者のチェックをするバリケードがある。

この港湾地区には基本的には政府関係者や商館関係者しか立ち入れない。しかし私は抜け穴を持っていた。

ゲートへ続く道を何食わぬ顔で歩いて、入行管理官に近づくと、通行証を見せた。

通行証では私は水谷の商館で働く職員となっている。

ちゃんと社員名簿にも載っている。臨時職員扱いだ、そうしたのはその方が都合が良いからだ。何かあったときすぐに逃げれる。

管理官は興味無さそうに頷くと、周りの警備員に指示してゲートを開けさせた。

商館街は他の区画の中でも富裕な人々が歩き回っている。

ゲートを抜けた正面広場には噴水と、その周りのベンチには身なりの良い商館職員や軍人、政府関係者を示すバッジをつけた官僚が座っていた。

都市の大部分の物品は地理的な関係上半分以上が海上輸送されてくるから、この場所はまさに物流の初めとなる場所であった。

それだけに人が往来し、活気に満ちている。

水谷はこの商館街の五街区に小さな商館を構えていた。

水谷

歩きで水谷のいる五街区まで行くのは時間をロスするから、正面広場のバス停でバスを待つことにした。

普段水谷とはノーアポで会いに行くのだが、いない場合無駄な時間を食うので、今回は電話をしておこうと思った。

一瞬公衆電話の場所を思い出そうと頭を使ったが、すぐに携帯があることを思い出し、携帯を使うことにした。

この携帯は昨日救国軍からもらったもので、普段私は携帯を持たない。

盗聴などされて無いだろつかと疑ったが、仮にされていたとしても特に痛手ではないので、使わせてもらうことにした。

数秒の呼び出し音の後、女性の声が聞こえた。

「お電話ありがとうございます、水谷商社受付です」
知っている声だ。

松原という事務員で、商社の中ではベテランの社員なので顔と名前ぐらいは知っている。

「宮本だ。水谷に会いたいんだけどそこにいるかな？」

「宮本様ですね、水谷社長は自室におられます。お電話をお繋ぎ致します」

「いや、良い。そちらに向かう旨だけ伝えてくれ」

「了解いたしました、お車を御回し致しますのでそちらの場所をお教え頂けないでしょうか？」

「いや必要ない。すぐなんだ。水谷によろしく話を通しておいでくれ」と言って電話を切った。

後は、バスに乗って向かうだけだ。

水谷の商館は五街区の×字型の正面にある。

バス停からは十分ほどで着くし、迷うような場所には無かった。

五街区は洋館が立ち並ぶ港湾地区の中でも各国の大使館、公使館の関係者が多く住んでおり、一際目立つ大きな洋館が燦然と立ち並び、特に洗練された建物が佇んでいる。

この五街区に居住を許される事は港湾地区の中でもステータスであり、政治的、経済的な力の強さを誇示する事にもなる。

水谷は政治面での力、というか関係が強く、この地区に住む弁口を貰っているのだ。

私が港湾地区のゲートを商社の職員というだけでチエックも無しに素通りできるのも、彼の力の大きさゆえだった。

水谷の商社までの道は各街区を貫く動脈のような道路をひたすら直進していけば良いのだが、今夏の暑さには本当に参った。

ワイシャツは汗が滲み、途中自販機に立ち寄ってコーヒーを二本も買い、その度に立ち止まって日陰に行き、タバコを吸う。

そのため思った以上の時間がかかっていた。
現在正午近く。

次ぎの業者に回るためにも、自然と猛暑の中で歩く速度をあげた。

そうして視界の端に水谷の商社と看板が見えた。

ビルの三階の一室に居を構えているだけの小さな会社。

奴がストリートチルドレンから這い上がった、あれが砦だった。

ビルの中に入り、三階のオフィスのガラス張りの扉を開けると、からんからんとベルが鳴り、事務員の松原さんがデスクから立ち上がって歩み寄ってきた。

他の事務員も見知った顔なので、一瞬こちらを見たがみな各々仕事に眼を戻した。

「お待ちしておりました、どうぞこちらへ」と松原さんが私を先導し、水谷のガラス張りの部屋へと案内した。

外からガラス張りの室内を覗くと、水谷は昼食の弁当にがつついてるところだった。

「水谷社長、宮本様が御出でになりました」

水谷は弁当を食べている手を止め、こちらに笑顔を向けると椅子から立ち上がった。

「宮本さん、よく来てくれたね。待ってたよ、座ってくれ」

そう言っつて椅子に座れと手振り以示す。

「今日はどんな用件だ？ 弁当食う？」

私は答える前に朝から吸いたかったタバコをポケットから取り出し、火をつけながら言った。

「仕事の話だ。今回はきついかもしれないけど、何とかして欲しい」
そう言いながらバッグから注文品の控えを取り出して手渡した。

水谷は最初こそ何気ない風に見ていたが、すぐに笑顔を消して険しい表情に変わった。

「……宮本さん、マフィアに囲われてんの？ こんな注文、尋常じゃねえよ」

「マフィア以上に厄介なサルだよ。ただどうしても揃える必要があるんだ」

「いやいや、これはやべえから。これだけ大量に武器を横流しして貰って、もし官憲やマフィアにばれたらいらぬ疑いをかけられて下手すれば殺されるっすから。

絶対無理です」

やはりな……。こうなると人海戦術で行くしかない。つまりは片っ端から業者に当たって分業で商品を揃えてもらう。

「水谷君にとって可能な範囲で集めてくれりゃいんだよ。あんたにとつて現実的な数字を弾いてそれを納入してくれれば良い。

金は幾らかかっても構わない。無理もしなくて良い。全部揃えてもらおうなんて端から考えてないさ」

水谷はかなり苦い顔をしながら、眉間に皺を寄せたまま控えの用紙を睨んでいた。

「……俺が用意できんのは小銃七丁とレーションぐらいですね。レーションにしたってどこまで集められるかわかんねえ……」

「小銃はもちろん弾薬付だろ？ 七丁分の。レーションもわかんねえじゃ困るから、算段した時点で後からでも電話をしてくれ。その控えに番号も載ってある。

それから不測の事態、状況が変化した時もかける。後から急に無理でしたじゃそれも困る。

こんなこと言いたくないけど、状況報告はなるべく早く頼むよ。今回は期限付きの注文なんだ」

水谷はこちらのあまりな注文にハツと鼻で笑って、眉間に寄せていた皺を変えて複雑な表情をしながら笑った。

「ああ、分かった。なるべく揃えるよ。

残りはどうするんですか？ 当てはあるんですか？」

この辺の心配をしてくれるほどこいつとは本来仲は良い。

普段ならこんなくだけた感じで商談はしない立派な商社マンだが、私には生来の性分を見せる。

「分かんないな。ともかく友人知人に当たってみる。頼んだ。じゃ、連絡待つてる」

私はちょうど吸い終ったタバコの火を消して立ち上がった。

「ええ……これで帰るんですか？ 一回話は置いておいて昼食一緒に摂ろうよ」

「いや、まだ商社を回る必要がある。悪いけど断るよ」

「分かりました、じゃあそこまで」

水谷は苦笑いに似た笑顔を見せると、私の背中に手を回し、玄関まで送ってくれた。

十分ほどの出来事だった。

オイネル

水谷の商社から出て、再び酷く憂鬱になる猛暑の日差しを浴びながら、次に目指したのはオイネルの商館だった。

オイネルっていう奴は比較的規模の大きい会社を持つ外国人業者で、西南諸王国の中の小国の貿易会社の幹部で、東アジア会社三藩半島支部氏泉半島局長という肩書きを持っている。

要するに、どこかの小国の貿易会社の氏泉半島担当の貿易商ということらしい。

しかし肩書きほど上品な奴ではなく、正直言って苦手だ。

奴の会社はキナ臭い噂ばかりで、貿易先の国の裏組織と頻繁に接触をとって交易を有利に進めると専らの評判だった。

だがそれでも奴は六街区の中では相当な顔で、それなりに嚴重な警備の下で商館暮らしをしている。

半分は裏組織みたいな会社で、もう半分は政府から認可されたまっさらな純白の許可証を持つ会社。

そんなんだから、オイネルという奴も相当癖と裏のある奴だった。

再びバス停からバスに乗り、十五分ほどバスに乗れば外国系の業者が住まう六街区の町並みが見えてきた。

この地区ほど建物の統制が取れてない地区は無い。

東盤国を初めとする極東系国家、西欧やそれに付随する西南諸王国、そして北方の諸民族らがなんの差別も無く無作為に土地を借りて、自国風の建物を建てたのだから、その有様は雑多の一言に尽きた。

歩いていると、突如携帯が音を鳴らしながら震えた。

着信らしい。

なので近場の北詮風の建物の屋根の下に隠れて太陽をやり過ごし、電話をポケットから出した。

私は水谷が何か言い忘れた事でもあって会社の電話の履歴から電話をかけたのだと思ったが、出てみると女の声が聞こえてきた。

「山崎だけど、今日の予定は？」

……昨日のあの女か。

「業者を尋ねて回ってるところだ。いま忙しい上にクソ暑いから電話は後にしてくれ」

「決まった商談は？」私の言葉は無視して聞いてくる。

「まだ何ともいえないな。業者の一人に掛け合ったが、当然全部は引き受けられないから、出来るだけ集めるって話だ。

その業者も具体的な発注できる商品の量や種類は決まってない」

「そう……何かアクシデントは？ 懸念材料は？ 疑問は？ 必要な事は？」

……質問の多い奴だ。

「何も無い」

「わかった。じゃあまた今夜電話をかける」

それだけ言われて一方的に携帯を切られた。

毎日電話をかけてくる気か。監視されてるようで気分の良いものじ

やない。

しかし金と命を握られてるのは事実で、不平を言う権利も無さそうだったから、暗い気持ちを押し込めてまた歩き出した。

オイネルの商館の門の前まで、汗をだらだらとかきながら、コーヒー二杯と麦茶、タバコ一箱の内の半分以上を消費して、ようやく辿り付いた。

恐らく、これでいないと言われたら運の無いその辺のガードレール達は私の意志と鉄板が入った靴によって足型を残される羽目になるだろう。

この商館には、外国人業者の中で比較的重要な業者という事で国から警備員が配備されていた。

門の前でこの暑い最中ヘルメットと長袖の警備服を着て虫の居所の悪そうな警備員に近づき、話しかける。

「水谷商館職員の宮本だ。通してくれ」と言っつて身分証明となる通行証を見せた。

警備員はヘルメットのつばを掴みながらそれを覗き込むと、頷き、門を開けてくれた。

警備員に伴われて商館の中庭を歩く。

庭は凝っていて、オイネルの本国から取り寄せた木々や花々が飾られていた。

奴の自慢の庭らしい。

それらの庭園の風景を、来客者にどうしても見せたいのか、商館へと続く道は必ずこれらの庭園の木々や草花を見せられる配置で商館まで伸びていた。

そうして商館に着くと、警備員にドアの施錠を外してもらい中に入れてもらった。
調度品。

目に付くのは正面の受付と、受付の後ろの壁にかけられた巨大な絵画だった。

宗教の聖典の一場面を描いた絵画だとオイネルは説明していたが、値段が何億という凄まじい代物だった。

警備員も商館の中に入り、扉を閉めてそのまま玄関の前で立ち尽くす。帰るときにまた声をかける決まりになっていた。

私は受付まで歩いて行き、顔の整った受付嬢に声をかけた。

「水谷商館職員の宮本だ。局長はご在宅か？」

受付嬢は気品のある顔立ちで、柔らかく笑った。

「はい、宮本様ですね。社長は現在自室におられますので、ご案内いたします」

チリンチリン、と受付嬢がベルを鳴らすと、年の若い使用人の少年が音も無く歩いてきた。

「オイネル社長のお部屋へ」

「かしこまりました」と使用人は受付嬢に頭を下げると、私を先導して歩き出した。

階段を上がり、恐らくは高いのであろう廊下の台座に置かれた調度品の数々を見るとも無く見ながら、前を先導している歳若い使用人に話しかける。

「これだけの調度品を買い付けて、飾って、何がしたいというんだ？財テクにしたって火事になれば一貫の終わりだしあいつも安全な身の上じゃねえだろ。君どう思うね？」

「いえ、わたくしのような一介の使用人には分かりかねます」

「私的な金じゃなく会社の金で買ってんだぜ？ 実に羨ましい話だね」使用人は答えなかった。

使用人はオイネルの部屋の前で止まり、抑制の効いた声で扉をノックした後、「オイネル様、宮本様がお見えになっております」とウイタニア語で伝えた。

中から何か声があったが、声が小さすぎて私には聞き取れなかった。

「どうぞお入り下さい」と言って使用人は扉の前で私に頭を下げる。「ご苦労さん。下がって良い」そう言うと、使用人はまた音も無く廊下を歩いていった。

部屋に入るとオイネルはデスクの上で何か書類を眺めていた。

「おい」と声をかけるとオイネルは私を見るなり首を傾けながら（彼の癖）気だるそうに言った。

「宮本、今日は何のようだ、注文か？」ウイタニア語であったが、私には意味が理解できた。

「そうだ、今回ほど貴方の力が必要だと思った事はないっていうくらい困った依頼主がいてな、貴方に泣きつきに来たわけだ」と、私もウイタニア語で返した。

オイネルは鼻で笑い、また書類に目を落とした。

「ならさつさと泣きながら注文品でも言ってみたらどうだ？ 俺は忙しい。泣き終わったらハンカチで拭いて今度はカウンセラーにでも行ってくれ」いつもどおりむかつく野朗だ。

そこで私は早速注文品の控えを手渡した。

オイネルは興味無さそうに控えを受け取ると、少し目をやって興味をそそられたのか指を額に当てながらふうん、と呟いた。

「揃えるのは問題ないが、問題は揃えた後だな。こんなに大量の武器を買い付けて、官憲が嗅ぎ回ったら厄介だ」

やはり、水谷と同じような事を言う。が、オイネルは続けた。

「よし、おれが本国から注文してやろう。港からの横流しだと官憲にはばれる可能性があるが、直輸入なら問題ねえ。まあ密輸になるがな。全部十日以内に揃えられるぜ」

という極めて意外な答えが返ってきた。

「本当か？ 十日以内に全部？ それは、助かる、けど、幾らぐらいかかる？」

「そうだな、まあ大雑把に一千万から一千百五十万つてところだな。まあ話はお前がそんな金を持ってれば、だが？」

と言ってこちらの様子を伺うように空虚に笑った。

こいつの見積もりどおりだと赤字になる。

しかし、話はしてみようと内情を打ち明けることにした。

「金はある程度持つてる。一千万だ。それ以下にはならないのか」
すると今度はオイネルが意外だったのか真顔になった。

「ほう、お前がそんな金を持つてるとはな。よしよし、良いだろう。
商品は必ず十日以内に全部揃えてやる。だが最低ライン、一千万は
必要だ。水増しはしねえから全部よこせ」

小銃や狙撃銃、レーション弾薬を、これから人海戦術で業者に当た
って、プラスになるかマイナスになるか分からないような注文をす
るより、彼に頼んでさっさと終わらせた方が安全かもしれない。
救国軍の頭は、揃えた分プラス三百万と言っていた。この条件で金
を全部支払っても、最終的には三百万の利益で悪い話じゃ無いはず
だ。

「よし、商談の内容はそれで良い。金の受け渡しはどうする？」と
私も踏ん切りをつけて答える。

「後払いで構わん、が、証拠に一千万持つてこい。話はそれからだ。
お前が嘘をついたことはないが、疑り深い性格だな」

「分かった、明日持つて行く。この契約で異存は無い」

契約内容は書類をかわさず、口約束だがこいつは信用できるから、
不安はなかった。

あるとすれば、予期せぬ不測の事態に対してだけだ。
オイネルは幾分上機嫌になり、玄関まで見送られて（見送られたの
は初めての事だった）商館を出、帰り際に携帯で水谷に注文のキャ
ンセルをして、家に帰ることとなった。

家の近くまで来た時はまだ午後四時頃だった。

移動の方が圧倒的に時間を食う。

時間合わせのために駅からわざわざ歩いて家に向かったのだが、それでも一時間半しかかからなかった。

今は大口の注文があるから新規の注文は受け付けていないため、やることもなかった。

どこか喫茶店でも入って時間を潰そうかと思い、一度立ち止まって建物の壁にもたれかかった。

そして、無意識に額に手を当てると自分が熱を発している事に気づいた。

具合が悪い事には気づいていた。

しかし本当に熱だとは気がつかなかった。

それほど現実の状況に夢中になっていて、余裕が無かったのだと思っただ。

タバコを取り出して、火をつけると、通り過ぎた往年の男性が不快そうな顔をした。

それで言い訳のように携帯灰皿を取り出し、通り過ぎた時点で胸ポケットに入れ替えた。

とにかく、だるかった。

家に帰って休みたいのだが、昨日も早く帰ったからそういうわけにもいかない。

喫茶店に行こうという考えも、実際に行こうとする段になると躊躇

った。

喫茶店のような人目が多いところは今は神経が過敏になっていて嫌だ。

確か八条通りに個人スペースの喫茶店があったはずだ。

何ならビジネスホテルでも良い。

そこまで歩くのも億劫だから、タクシーで行こうか。

そんな思索に耽っていると、突如として男の声で声をかけられ、驚いた。

「宮本さん、どうしたんですか、こんなところでタバコを吸って。条例違反で罰金取られますよ?」

私の隣で松崎が可笑しそうに含み笑いをしながら肩を掴んできた。

こいつは刑事で、警部補の役についている、馬状警察署きってのベテラン刑事だ。

……今のも、本人にしたら、面白いジョークを言ったつもりなのだろう。

「てめえ張ってやがったな。なんか用か」私は気だるい気分ながらも、状況が状況だけに緊張した。

救国軍のことだ。

反体制派への武器売買。

それだけで死刑になるからだ。

ナイフを売ったって死刑なんだから、小銃二十丁と狙撃銃じゃ八つ裂きでもおかしくない。

恐らく調子の悪さと緊張で青ざめている顔を、松崎から背けた。

松崎はむっふっふ、とむせたような笑いを零しながら言う。

「確かに、貴方を張ってました。ようやく見つかって抱きしめたいくらいの気分ですよ。」

「どうです、私の奢りで一杯」

「冗談だろ？」私は本心から嫌な顔をして松崎からまた顔を背けた。私はこの男に対しては悪意を隠さない。

こいつのせいで今まで二回ほど寄生先をダメにしたからだ。

「私は調べてることがありますね、貴方から情報をもらう代わりに私も貴方にとって有益な情報をリークしましょう。どうです？」

言動から察するに私に何か疑いがあるわけじゃないらしい。

確実にそうだとは言いつけないが、どちらにしても警察が私をどう思っているか、いまどういう捜査をして何を知っているのか知る必要があると思う。

気だるくはあったが、それどころじゃないから承諾する事にした。本当に熱が上がりそうで、おまけに吐きそうだった。

「タクシー呼べ……」そう言うと松崎は嬉しそうに頷いた。

タクシーの中では殆ど無言だったが、事前の話し合いで場所は八番通りにあるビジネスホテルの一つに行く事になり、ホテルのフロントで部屋を二部屋借りた。

それぞれ別室に通され、ホテルマンが去った後に私の部屋で会合する事になった。

「ビールは飲まれますか？」部屋に入ってきて席に着くなり松崎は

食事のメニューを見ながらそう言う。

「俺あ酒類はダメだ。あんた自由に飲んでいいよ」

私はまた無意識に額に手を当てそうになったが、体調の事を聞かれるのも嫌なので途中で軌道を変えて頬に手を当て、すぐに下ろした。

「で、あんたは何の捜査をしてるんだ？」

松崎はメニューに目を向けたままで喋った。

「ん〜、捜査というより社会的な狩ですな。モンスターを捕まえるのです」

「モンスター？ なんだそりゃ。殺人鬼でも出たか？」松崎の幼稚な表現に一瞬呆れたが、言い終わってからその意味するところに気がついた。

「ご存知ありませんか？ モンスター。完結型人格障害の患者の蔑称ですよ。」

D・Y・フロストの唱えた人格障害の一種です。

この障害の患者は社会的に極めて危険な事件を犯す率が高く、隔離すべきであるとの思想のもとに、保護法案が生まれたんですな。

で、私の管轄区にその患者がいることが確認されたので、保護するように言われたのです。

……面倒な仕事は、古い先短い老刑事に回されるんです。ふっふ」

私はさらに呆れて、同時に見下していた。

「こづいつちゃなんだが、お前は刑事として有能だと信じてたんだ

が、こんなくだらないことをやらされるようじゃ落ちぶれたもんだな。

俺は心理学も精神分析も眉唾で信じられたもんじゃないと思ってるがね。

で、そんな心理学者の思い込みを通したみたいな法案の捜査に、なんで俺と接触してまで調べたいんだ？

捜査のプロのお前が、本気になってこんな捜査をしてるなんて本当に焼きがまわったな」

松崎はこりや参ったとばかりに大笑いをした。

その笑いの中には何だか気まずさのようなものが見て取れた気がした。

「いやーまさにその通り、参ったな。

しかし署長が心理学の良き理解者でしてね？ 保健局から連絡を受けて真に受けたらしくて、何が何でも捕まえてきたまえて言われましてね？ 断れなかつたんです。

しかし……調べていくうちに割りと言真剣に捜査する必要があると思いは始めてきたんです」松崎は急に真顔になってタバコを取り出した。

私は彼が火をつける前に質問をした。

「というと？ というかそもそも俺から何を聞きたいんだ？」

「私が捜査してる彼女には生体IDが無いんです。貴方と同じようにね。

だから、戸籍さえ入手すれば誰にでも成りすますことが出来る。戸籍の入手は生体IDと違って管理が甘く、入手が容易です。

つまり、何でも出来るんですよ。どんな犯罪を犯しても戸籍を変え

れば犯罪をリセットできる。非常に危険なんです。

それは、彼女が人格障害であるからじゃない。私だってそこまで心理学を信奉してるわけじゃないんでね、そのことは判断に入れないですが、彼女の経歴は非常に不可解で謎だらけだ。一つ大きな事件に関わってる可能性があるんです。もし本当なら、国がひっくり返るほどのね。

彼女は、沢村美咲と言います。貴方が以前いた廃人会というグループの幹部です。まあそれも貴方と同じか。ともかく彼女について知っている事はありませんか？」

沢村美咲。久しく忘れていた名前だ。

頭の良い奴で、顔立ちが整った奴だと記憶している。廃人会でも私と同じ古株だし、家族の真似事をして廃人会の何人かと一緒に暮らした事もある。

いまどうしてるかなど知らない。別れてから、それっきりだ。

「俺が仲間の情報を垂れ込むと思ったか？ まあいまは何のつながりもないが、それでもペラペラ喋るつもりはねえよ」至極当たり前な答えを、口にした。

あいつが大きな事件に関わっていようが、何してようが、かつての仲間である以上口を噤む義理はあった。

松崎は意地の悪そうな顔でニタリと笑う。

「さすが仲間想いですな。不良はなぜか仲間をかばいたがる。簡単に仲違いで仲間を棄てるくせにね？」

しかしならば尚のこと喋った方が良い。

これは未確認情報、というか確証はないんですが、ある反体制派が彼女を狙ってるようなのです。

理由は分かりませんが、かなり高確率な情報です。どちらにせよ保護は必要なのです」

ある反体制派……話に繋がりはなかったが、まさかと思って聞いてみた。

「その反体制派ってのは？」

「ん？ 気になりますか？ 救国軍ですよ」

嫌な予感が当たった。

まさかまさかで本当だとは。

近々の救国軍からのオファー、松崎からの救国軍の話し。

こんな偶然があるのだろうかと思った。

私は偶然を信じない。偶然の裏には必然がある。だとしたらそれは何だ、という話だが、そこから先は分かるはずも無かった。

「ともかくですね、彼女について知っている事を話して欲しいんですよ。お願いします」という松崎の声に思考を中断させた。

「知ってる事って言うてもな。あいつの居場所を知ってるわけじゃねえからな」

「何かしらのヒントでも良いんですよ。例えば、貴方と沢村はなぜ生体IDが無いのとか、廃人会設立と解散の経緯とかね」

「それこそ話しづれえよ。お前の立場だけでも、警戒に値するしな」

「いまさら貴方をどうこうしようなんて思っちゃいけませんて。」

ここではバッジも拳銃も関係ない。貴方が何を話そうとそれを咎めることはありません。そうだな……じゃあ世間話でもして信頼を高めましょう。何を話しましょうか？」松崎はふざけてるのか顔をニヤつかせながら考える素振りをする。

「うーん、貴方が興味があることが良いな……救国軍についてとか」

私は動揺を表に現さなかった……はずだ。

内心では少しぎよっとした。

こいつの鋭さは半端じゃないから、まさか感づかれてるのかと。

私と救国軍の繋がりを知っているのか？ それともかまをかけてるのか？ それとも偶然の質問か？

話の流れから偶然是無い。

かまをかけているのか、知っているにしても、その意図がどうであるのか、読みきれずに押し黙ってしまった。

「それとも……今日オイネルという商人がたくさん武器弾薬を発売した話題についてなんてどうでしょう？」

これではつきりした。

救国軍とその発注内容をこいつは理解している。少なくともそう推理して疑ってる。

だからこちらも下手にしらばくれなかった。

こいつは人に口を割らせる点においては恐ろしい頭の回転をみせるから、しらばつくれるても無駄だ。

「……何が言いたい？」正確には何がしたい、と言いたかった。私を捕まえる気なのか、そうでないのか。

バッジはここでは関係ないらしいから、安全だとは思っただが、それでも意図を確認せずにはいられなかった。

「ふふ、その反応だと凶星らしいですね。かまをかけたんですよ。私はオイネルという商人が武器を大量受注してたのを今日の署内の報告書で知っていたのです。オイネルは軍需品の横流しをしてるから電話を署の連中が盗聴してるんです。で、救国軍の話に対して貴方が反応した時に間違いないなと思っただけですよ。それだけの武器を発注する客は限られている。この地域で活動してる団体となればその数はまた更に限られるし、救国軍も活動のための物資を調達するために売人が必要ですからね。どうです？ まだ焼きが回ってないでしょう？」

なるほど、それで私に接近してきたのか……。

「で、どうしたい？」私は湯飲みを握ったまま固まった。警戒態勢に入ったつもりだった。警戒態勢
やつと言動次第では何らかの行動を取るつもりだった。

「だから、どうもしないんです。バッジはここでは関係なし。この事も他言はしません。」

私はあくまで捜査にだけ徹したいんです。貴方が何をしようがどうでもよろし。貴方は捜査対象ではないですからね。捜査のために貴方を調べたに過ぎません。

今の質問は貴方が救国軍と繋がりがあるかどうかの確認です。つきましては、本題なんです。話し合いは辞めにして協力関係を結びませんか？ 端からそれが狙いな訳です。

貴方は救国軍の動きを私に報告し、私の捜査に協力する。貴方には見返りにいざというときの身の安全と、警察の情報、それ

から捜査協力の金一封を差し上げましょう」

と満面の笑みで言う。私は顔が引きつる感覚を覚えながら怒鳴る。

「ふざけるんじゃないよ！ ただでさえ俺にとって火薬に囲まれたような危険な状況なのに、ガソリンまでぶちまけるような真似が出来るか！！」

だめだめ、話がちげえよ。冗談じゃねえ。俺は帰る」

本当に気分が焦っていて、声が震えた。すぐさま部屋を出ようとバツグを引つつかんだ。

「あ………そうか。じゃあ死刑だわ」

立ち止まる。

そこられるとは思っていた。だから最初から「はい」しか答えはなかった。

「危なくなったら本当に保護してあげますって。むしろこれは良い提案ですよ？ 公権力の力を甘く見ちゃいけません」

私にお任せあれ。悪いようじゃあ致しません」松崎はしてやったりという風にむかつく感じで笑ったのだった。

完全に、詰みだった。

夜八時、松崎と別れるとタクシーで家の近くまで来た。歩いて五分ほどの距離まで。

ぐっと上がった熱による体調不良を我慢しながら、家までたどり着いた。

鍵を取り出し、ドアを開ける。

廊下の奥の居間では、テレビと生身の笑い声が聞こえてきた。何だか、ホツとした気がした。靴を脱ぎ、ただいまと声をかけると、居間の中から加奈子さんが顔を覗かせて微笑んだ。

「あつ、おかえり〜。今日はわりかし早かったね。ご飯食べる？」

「ええ、部屋に戻ってから頂きます」具合の悪さで食欲は無かった。

部屋に戻り、取りあえず一時的にバッグをベッドの下に隠し、着替えてから居間に下りる。

おじさんはビールを飲みながらナイター中継を見ていた。大の野球好きらしい。

「おお！ 瑞樹君おかえり！ どうだい？ 君も玉には一杯」

酒は好きではないが、飲もうと思えば飲める。しかしこんな調子の悪い時に飲む気はしなかった。

「いえ、今日は早めに寝ようと思うので、お酒は控えておきます」

「おや、まだ体調が悪い？」

「ええ、少し……」そう言つとおじさんは額に手を当ててきた。酒で体が火照っているのか、おじさんの手のほうが熱かった。

「あれ？ 熱があるのかな？ ないのかな？ 加奈子、計ってあげて」

「それより体温計のほうが早いでしょ」加奈子さんは苦笑いのよう

な笑いを零して、体温計を持ってきた。

不思議な感覚だった。さっきまで自分は何をしてたんだろう、とぼやけた頭で考える。

何でこんな普通の家庭の中に、私はいるんだろう。さっきまで私は、誰と、何の話をしていたんだろう。

自分がどの自分か分からなくなる感覚。平衡感覚を失う感覚。目が回る。ぐるぐると回る。ぐるぐるぐるぐると。

気がつけば、後ろに倒れこんでいた。

何かの叫び声が聞こえるが、それは言葉として認識されず、音として記録された。

眼の前が真っ白になる。

その間際、何の感情も湧かないのに涙腺から涙が鼻筋を伝った気がした。

眩き

気がつけば部屋のベッドに寝かされていた。

目が覚めてすぐに時計を見る。すると時計は九時を指しているところだった。

半身を起こすと頭に鋭い痛みが走り、やがて消える。

あの後倒れこんで、そのまま意識を失つたらしい。

布団を投げ捨てて、気だるい感覚の体を無理やりにベッドから引き剥がして立ち上がると、現在の状況を確認するために部屋のドアを開けた。

階段を降りると朝の九時にも関わらずテレビの音が聞こえており、加奈子さんか伯父さん、二人のうちのどちらか、或いは二人ともがいるのだろうと思った。

この時間は二人とも会社と学校に行っているはずだからいぶかしんだが、すぐに原因は自分にあると思いついた。

二人の性格からして私を放ってそれぞれの勤務先に行くことが出来なかったのだろう。

階段を降りきると大きな鼾が聞こえてき、居間に入れば眠りこけているおじさんがソファで腕を組んだまま寝ていた。

テーブルにはパンと目玉焼き、ソーセージとご飯が二人分置いてあり、その一つは食べかけられたままになっていた。

私は伯父さんのところに近寄ると、揺すって「伯父さん、伯父さん」と声をかけながら揺り起こした。

しばらくすると目が開いて、「ん？ ああ、いま起きるよ」と言っ
て欠伸をすると、急に覚醒したのか目を大きく見開いた。

「ああ、瑞樹君いつ起きたんだい？」

「いま起きたところです。下に降りたらおじさんがいたので起こし
てしまいました。すみません。会社は？」

おじさんは赤目がちな目をこすりながら答える。

「いや、ちょっと休んじやったよ。それより瑞樹君体調はどう？」

すぐに自分のために休んだのに気を使って言わないんだと分かった。
この人は優しい。だからそういう行動を取ってもおかしくはない。

「眠ったらすつかり良くなりました。僕のために会社を休んだんで
すよね？ すみません……」

おじさんは笑う。

「いやいや、おじさんも玉には休みが欲しかったんだよ。それより、
瑞樹君が来てもう一年になるね。」

おじさんも少しは、ご両親の代わりになってあげられているかな「

両親……宮本瑞樹の両親は死んだ。
でも私の親ではない。

私に戸籍を売った本物の宮本瑞樹の両親の事を言っている。
奴の事は何でも調べたし本人から経歴から性格まで聞いた。
契約が成立して初めて私は奴に聞いた。

「……………なぜ戸籍を売ろうと思ったんだ？」

「疲れたんだ。」

それが奴の答え。いまだどうしてるかなんて知らない。

けれど、売らなければこの生活が待っていたのに、馬鹿な奴だ、と私はいま思っていた。

「おじさんはとても良くしてくれてます。本当に感謝しています。」

この家に来たことで、父と母が亡くなった孤独感が、埋まった気がするんです」

ぺらぺらと回る口。

それが酷く卑屈で、汚いものの様に思えた。

「うん……そう言ってくれると嬉しいよ。おじさんも、琴音と健次郎君と一緒に無くしたことはショックだった。二人の忘れ形見だから、引き取ったけど、今では本当の息子のように思ってる。」

座りなよ。僕は本当に君を引き取って良かったと思ってる。感謝したいのは僕のほうなんだ」

真正面から、私の瞳の奥深くの感情の淵までも覗き込まれるような視線。堪えきれず、座る動作をして目を逸らした。

こいつが語っているのは俺じゃない。語りかけているのは。宮本瑞樹と言う幻影。幻影なんだ。

芝居している俺を介して、幻に語りかけているだけ。

ああ、馬鹿だな、宮本瑞樹。お前にはこんな良い親戚がいたのに、てめえで勝手に逃げやがって。馬鹿な奴だ。

「加奈子は……」おじさんが唐突に呟く。

「本当の娘じゃないんだ。あの子は……里子として僕が引き取った子だ。妻が生前ボランティアで孤児院の世話をしたときにね、加奈子がいたんだよ。」

縁があつて引き取っているけど、あの子も君と同じ境遇なんだ。二人とも大切な息子と娘だ。おじさんに何かあつても……瑞樹君、加奈子を守ってやって欲しい」

何故だか、その言葉には返答が出来なかった。

真正面から見据える瞳が、偽ることを許さなかった。

滑るように流れ出そうとする嘘の言葉が、喉の奥元で止まる。

何か言わなければいけなかった。何か。何か。

「僕は……」言葉が流れ出そうとする時、おじさんの鼻でハツとした。

眠っている。疲れたのか、眠気が残っていたのか、眠っている。

「俺は、違つんだよ」「小さく小さく、ポツリと掠れた声はテレビの馬鹿笑いにかき消される。

「俺は違つよ」「呟いて、自分の矮小さと卑屈さに、歯軋りをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4775r/>

落陽

2011年12月14日00時49分発行